

とに通じると考える。

(注三) 注三の「卒都婆流」の〔評説〕。

(注四) 長門本・源平盛衰記で俊寛が日吉山王ならば参詣もしようがと述べるのと、何か関係があるのであろうか(延慶本の場合は後を参照)。

(平成七年五月八日受理)

か言つて、悦び勇み合った由である。五節に記した「為木曾追討軍兵向北國事」では、この軍兵の門出に当たつて厳島の神主が大明神の託宣を演出したことが記されていた。本記事は、これに連なる記事で、延慶本編著者の脈絡の付け方が見えて来そうである。又、日吉山王と厳島大明神とが並んで口を上った点は、前に記した平康頼の卒塔婆への祈願の言葉と何か関わりがありはしないかという気もする。

最後に源平盛衰記の「屋嶋内府八歳子亡」で宗盛が、当時八歳の子副将について「いづくしまのやしろにまいりて祈り申侍りし程に明神の御利生にや懷妊したり」と語っている。八歳の厳島大明神の申し子と云えば、前稿で記した安徳天皇が浮かんで来るが、源平盛衰記では安徳天皇を厳島大明神の申し子としてはいない。安徳天皇の場合は入水だが、こちらの申し子は駿河次郎に刺し殺され、二人の女房がその死骸を自分の体に結び付けて、身投げをしている。余りにも凄惨な結末だが、厳島大明神は平家の滅亡を黙って見届けたということであろうか。

(注一) 「源平盛衰記と平家物語——平家物語研究史を展望しつつ——」

(『文学』昭和四八年五月)。

(注二) 『平家物語全注釈』上巻(昭和四一年五月)の「厳島御幸」解説。

(注三) 早く佐々木八郎は『平家物語評講』上(昭和三八年二月)の「厳島御幸」の「評説」で「恐らくは『平家物語』作者の虚構であろう」としていた。

(注四) この記事については、平田俊春氏が『平家物語の批判的研究』中巻(平成二年六月)の第六篇「平家物語の全編年記事と百練抄——「原平家」および吉記の復原的考察——」の第三章「安徳天皇紀(巻四―巻七)」の第一節「治承四年(巻四、巻五)」で注目している。

(注五) 早川厚一・佐伯真一・生形貴重共編著『四部合戦状本平家物語評釈(七)』の「新院厳島御幸の事(①発願)」の「語釈」では、本文の問題を指摘しながら「『人』が厳島御幸を怪しんだ意と見てよからう」としている。

(注六) 『平家物語略解』(昭和四年九月)の「高倉院嚴嶋御幸」に「なほこ、より章末に至るまでは大方御幸記に依り書けなるべし」とある。

(注七) 注五に同じ。

(注八) 注四と同じ節。

(注九) 自分の命を縮めるようにと祈願したという点は、平重盛の熊野詣でに類似している。重盛の熊野詣については拙稿「『平家物語』に描かれた熊野」(『人文』平成五年八月)に私見を纏めた。

(注一〇) 『平家物語の基礎的研究』(昭和三六年一月)中編「平家物語の諸本と詞章展開」の第四章「平家物語の詞章展開」。

(注一一) 注三の「徳大寺殿之沙汰」の「評説」。

(注一二) 拙稿「『攝政殿落留給事』をめぐる——『侍』の物語など——」(『鹿児島県立短期大学紀要』昭和五一年一二月)の第四節で述べたこ

少の異同がある」ということも記されている。

厳島の内侍達と清盛が親しかったことは、諸所に描かれていた。源平盛衰記・南都本と当道系諸本のうち覚一本・平松家本・竹柏園本・鎌倉本・百二十句本・両足院本では、実定の参籠の間、その内侍達が「舞樂も三度までありけり 琵琶琴ひき神樂うたひなど遊」んで、実定を慰めたと記されている。

さて、実定の厳島詣で以上に「平家物語」諸本に採り上げられているのが、

「康頼力歌都へ伝ル事」である。この逸話について佐々木八郎は、

康頼が自詠の歌を書きつけて流した卒塔婆が厳島に漂着したのは、熊野権現と、いま一つは平清盛の信仰が篤い厳島明神との、この二神の靈験によるものであるというように作者は構想した。殊に漂着した場所を厳島明神の神域にしたところに、特別の作為が見られる。

と記したが、佐々木がこの評説の対象とした覚一本別本を始めとする多くの「平家物語」では、これは康頼達が「鬼界嶋」で熊野権現に祈願したという逸話と康頼の和歌を彫り込んだ卒塔婆が厳島に流れついたという逸話とを結び付けて出来上がっていると考える。

康頼の和歌が厳島に流れついたという逸話は源平闘諍録にその元の姿を見ることが出来るのではないかと考える。源平闘諍録の「康頼於嶋造千本率都婆」では、卒塔婆は「住吉ノ西浦」と厳島社の前の渚に着いたことになっている。「住吉ノ西浦」とされたのは和歌に関係しているからではなからうか（因みに、康頼の和歌は歌枕「さつまかた」の証歌とされている）。

厳島社に流れ着いたという方は「爲康頼縁僧」が厳島明神に「祈聞主ヘト康頼之事」^ヲったことに依っている。源平闘諍録の「康頼於嶋造千本率都婆」は厳島社に結び付けた和歌の徳譚であろう。

源平闘諍録以外の「平家物語」諸本の「康頼力歌都へ伝ル事」は、この源平闘諍録的な和歌の徳譚（猶、源平闘諍録には熊野権現を勧請したという逸話はない）と熊野権現を勧請し、祈願したという逸話とを結び付けたものと考ええる。康頼が卒塔婆を流す時、一本でも都に届けて欲しいと祈願するのだが、その時、熊野権現だけを「南無帰命頂礼 梵天帝尺 堅牢地神 王域鎮守諸大明神 殊ニハ熊野権現」と挙げるのは当道系諸本のうち屋代本・竹柏園本・小城本・中院本・両足院本・八坂本（但し、中院本・両足院本・八坂本は、熊野権現に続けて「かいりうわうとう」（中院本）を加える。）で覚一本・平松家本・鎌倉本・太山寺本は熊野権現に厳島大明神を加え並べている。これに対して、源平盛衰記は熊野権現に日吉山王を加え、延慶本・長門本は熊野権現・日吉山王・厳島大明神の三神となっている。日吉山王が加えられた理由は詳にし得ない。^{（注一四）}

この「康頼力歌都へ伝ル事」の厳島明神は、清盛や平家との関わりが殆どない（赦免には清盛の意向があつたのだから、全くないとは言えないだろう）という点で珍しい例である。

次に、延慶本の「火燧城合戦事付齊明力還中」によれば、齊明威儀師の返り忠の意志と城攻めの方法とを記した密書を手にした時、平家の軍兵は「醫王山王ノ御計ヒニテヤ」とか「厳嶋ノ明神ノ齊明ニ御託宣アルニコソ」と

と述べていた。^(注10) 共に従うべきであろう。

さて、『古今著聞集』によれば、重盛が内大臣に昇進して左大將が空いた時、定実は「こののぞみ成就せば嚴島にまうづべきよしなど心の中に願を立」てたというのだが、屋代本・小城本・太山寺本・源平闘諍録以外の「平家物語」諸本では、この逸話はどのように描かれているのであろうか。

筆頭大納言であつたにも拘らず、平家の次男宗盛に越えられてしまった実定は、暫くは籠居する（延慶本・四部合戦状本以外は「大納言を辞してとする。四部合戦状本には籠居などない」）が、無意味と見て取って（四部合戦状本と中院本・両足院本・八坂本以外の当道系諸本には更に宗盛の弟達がその後を繼ぐに違いないと悲観してという具体的な文がある）、出家の意志を語る（四部合戦状本では、実定の出家をめぐって伺候の輩と對話がもたれた風になっている）。徳大寺家の者は悲嘆した（四部合戦状本と中院本・八坂本以外の当道系諸本とにある。源平盛衰記は法皇や天皇が出家という話に驚いたと記す）が、源資基が「長門本は賢基。源平盛衰記は佐藤近宗。南都本は後藤親範。源平盛衰記と南都本では実定が呼び出して相談することになっている。当道系諸本のうち覚一本・両足院本は藤原重兼、平松家本・竹柏園本・鎌倉本・百二十句本は重藤、中院本・八坂本は蔵人「のりはる」。当道系諸本のうち中院本・八坂本以外では尋ねて来た重兼（重藤）に実定が相談するとなっている。四部合戦状本は名前を記さない」平家を恨むのは不都合が多いと述べ（長門本は恨むべき筋の問題ではないといった風だが、源平盛衰記・南都本は朝廷と関係のない、清盛の私的な計

らいだと言つて、諫めている。猶、四部合戦状本には、この部分に相当する表現はない）、嚴島に大將就任祈願の為に参詣するように進言する（猶、南都本では嚴島の前に氏社の春日社に参詣することになっている）。実定は、この謀を肯つて（覚一本・平松家本・竹柏園本・鎌倉本・百二十句本には「ありがたき策」という表現がある）、その通りに賑々しく参詣し（但し、延慶本には「御心ナラス」という表現もある）、内侍達を引き連れて帰京し、謀の通りに左大將に就任したのであつた。

この「徳大寺殿嚴嶋へ詣給事」は、嚴島社そのものよりも寧ろ清盛という人間が対象に据えられている。その内容についても早く佐々木八郎に、これは不撓不屈の西光とは対蹠的であつて、地位を得るためにはあえて権門勢家におもねることを恥とせぬ堂上公家の姿を語ったものであるが、それをしも「めでたかりける策かな」といつてほめたところに、智巧主義、便佞主義の公家根性に共通する作者の一面が読み取られる。という批評があつた。^(注11) 公家根性と言つてしまえばそれまでだが、筆者にはこの「徳大寺殿嚴嶋へ詣給事」は諸大夫が貴族を救った物語として成立したのではないかと考えている。^(注12)

実定の参詣の様子は、精進して（源平盛衰記・四部合戦状本と当道系諸本とにある）嚴島に詣で、七日の参籠（四部合戦状本は期間を記さない）を遂げたと記されている。当道系諸本のうち覚一本・平松家本・竹柏園本・鎌倉本・百二十句本・両足院本では、この間「神明法樂のためにいまやう朗詠うたい風俗催馬樂などありがたき郢曲どもありけり」（諸本で多

朝廷の祈願などが厳島社に向けられたことも「平家物語」諸本に散見する。

先ず、建礼門院徳子の御産に当たって、「神馬ヲ被引事 大神宮石清水ヲ初奉テ厳嶋ニ至マテ廿三社也」と、神馬が引かれている（両足院本は厳島社に言及しない）。『山槐記』治承二年十一月十二日条によると、厳島社に馬一疋を奉じたのは、内大臣重盛であつた。その厳島社分については「伊津岐嶋御馬又被付在京神主」と記されている。猶、『山槐記』によると、この時重盛が神馬を奉じたのは九社に対してであつた（「平家物語」諸本は重盛が引いた馬以外の、朝廷が諸社に奉じた神馬として記しているが、そうしたものは歴史資料では確認出来ない）。

延慶本・長門本には治承四年十二月一日に「兵乱ノ御祈ニ安藝厳嶋へ奉弊使ヲ立ラル」という記事がある。南都攻撃の直前、「東海東山等ノ諸道ノ輩ラ皆ナ源氏ニ随ニケリ」（長門本にはこの文はない）という状況の中でのことである。この時、同時に伊勢大神宮へも使が立てられようとしたとのことだが、伊勢大神宮と厳島社（という取り合わせ）は、前記の神馬が引かれた社の最初と最後である。猶、この記事も歴史資料では確認出来なかつた。

延慶本・源平盛衰記の「為木曾追討軍兵向北國事」は、追討軍の門出に当たつて厳島の神主が厳島の明神が示現したかのように見せる演出をしたという暴露記事を載せる。その演出というのは、明神が老翁に化して六人の大將軍に「平家繁昌 源氏衰滅」の意の文章を奉つたということである。

延慶本・源平盛衰記は、内幕を暴露することによって、厳島明神まで担ぎ出しての賑々しい門出の空々しさを描き出したのである。このように源平盛衰記や延慶本においては、厳島社神主が劣勢の平家の志気を鼓舞する為に尽力したことが描かれる。

六

平清盛、仙洞、朝廷以外の厳島社関係記事で第一に浮かんで来るのは「徳大寺殿厳嶋へ詣給事」である。「平家物語」の「徳大寺殿厳嶋へ詣給事」の内容については、早く『参考源平盛衰記』が、

實定亦素望大將 曾祈嚴島而任大將之後 至治承三年詣嚴島賽也

事具見于著聞集 及玉海 共出于下 蓋以永萬中辭大納言與治承三年詣嚴島 附會爲編 妄繆

甚矣

と記していた。一方、「平家物語」諸本のうち屋代本・小城本・太山寺本と源平闘諍録とに「徳大寺殿厳嶋へ詣給事」等がないことについては握美かをるが、

〔闘〕は卷三相当卷を欠くので、高橋貞一氏が指摘されたように、卷三にあるのかも知れない（平家物語諸本の研究）。然し〔屋〕が欠いていることから推せば、〔闘〕も欠いていたかも知れない。新增補記事を常に章段のあとにおく〔四〕が、この記事を「鹿谷」の後に入れていることがそれを証明していると思うのである。従つて源平家にも「厳島詣」の記事はなかつたであろう。

も、手^{カラアラハシ}自書御願書 攝政殿有御清書「(四部合戦状本)」という珍品が残っている(摂政清書ということは四部合戦状本・南都本と当道系諸本にある)ということから「平家物語」に取り込まれたと考える。従って、この記事の中心は願文にあり、厳島社の霊験のあらたかさを語る句だった筈で、屋代本のように本文から離れてしまう(「抽書」)のも当然の成り行きだったと思われる。

延慶本・長門本・源平盛衰記の第二回の厳島御幸では、清盛と宗盛が高倉上皇に源氏に同心しない旨の起請文を書かせたことが記されている。平家の不安、疑心と高倉上皇への圧力を語る逸話であるが、源平盛衰記はこの起請文に関して更に後日譚を続ける。それは、還御の後、源中将通親に厳島で清盛に与えたものの中身を尋ねられて、上皇が事情を告白し、清盛の悪行は為義・義朝以上と言って、嘆き悲しまれた というものである。これは、清盛の上皇への圧力を悪行として、より明確に捉えたものになっている。猶、源平盛衰記は、最後に上皇の祈願を「わが御子孫を末の代百王までも朝家の御主として 御父の法皇に世を政奉り給て わが御命をめせなど祈申させ給けるにや」と後には思ひあはせけり」と記して、上皇の三箇月後の崩御に結び付けている。^(注九)

又、延慶本・長門本・源平盛衰記は、上皇の厳島からの還御を記した後「法皇夢殿へ渡せ給事」の章段を記す。これは、「世ノ常ノ御所」へ入られたことを今回の「厳嶋ノ御幸ノ驗ニヤ」とするものであるが、その出られた所を「楼ノ御所トイマ／＼シキ名アル御所」としたのは、第一

回の御幸の御利益が色あせてしまうのではなからうか。その点で、これら三本の第一回の御幸と第二回のそれとは厳密には整合していない。

更に、源平盛衰記は「玉虫立扇」の章段で、女房玉虫が平家の船の舳頭に立てた「みなくれなるに日出したる扇」を「故高倉院いつく嶋へ御幸の時三十ほんおりたて、明神に進奉」したものの(第一回か第二回かは不明)とする。この扇を使った経緯については、

平家都を落給ひし時 いくしまへ參社あり 神主佐伯景廣この扇をとり出し これは一人の御施入 明神の御ひさうなり かつうは故院の御情ときはの御まもり成へし されはこのあふきをもたせ給たらはてきの矢もかへつてその身にあたり候へし とのつとしてまいらせたりけるを これをけんしいはつしたらは當家いくさにかつへし おふせたらはけんしか得利成へし とていくさのうらかたにそたてられたる

と記されている。佐伯景廣は「故院の御情ときはの御まもり」と言っているが、これは先述の「新院恐御起請」に描かれた上皇の感情とずれているのではない(相手が清盛から安徳天皇へと変わっているにしても)。源平盛衰記や延慶本(後出)には、厳島社神主佐伯氏が平家を鼓舞しようとした逸話が集められているようだ。上皇が扇を奉納したかどうかは歴史資料では確認出来ない。

推考される)、中院本・八坂本はこの句を欠いている。この第二回の御幸については、「平家物語」に収める際の難しさが平田俊春氏によって、次のように指摘されていた。^(注八)

さてこの新院の厳島への出発と維盛の東国への出発がほぼ同時に行なわれ、そののちの両者の行動を編年的にみると、

- ①九月二十一日、新院の福原出発
- ②二十二日、維盛の福原出発
- ③二十三日、維盛の京都到着
- ④二十八日、新院の厳島社への願文奏上
- ⑤二十九日、維盛の京都出発
- ⑥十月六日、新院の福原還御

の如くに入りみだれており、編年的に記述することは困難な性格をもっていた。

今回の御幸の性格をどう捉えて「平家物語」の中に位置付けるかは、平田氏が指摘しているように「平家物語」編著者を悩ました問題だったかと思える。「平家物語」諸本の地の文(願文以外の文)に記された御幸の目的は、諸本を二種類に分けることになる。その一つは、延慶本・長門本と当道系諸本とである。これらの諸本は「天下静謐ノ御祈」と「聖躰不豫ノ御祈」の二つをその目的として挙げている。「天下静謐ノ御祈」は、五月の以仁王事件以来天下が「又シツマリモヤラス 天變頻ニ示シ地天常ニアテ 朝廷不穩^{カラ}」ということによるもので、これが平維盛率る軍勢の

東国下向という時期を意識したものとなっているようである。一方、四部合戦状本と南都本のもものは第一回の御幸のお札申しとなっている。又、源平盛衰記のものはお札申しとしながら、清盛にも頼朝追討の祈願の為に厳島に行くよう勧めたとなっている。源平盛衰記の後の方は、時世に絡ませたものだが、文脈に不自然なところがあり、二つの譚(目的)を強引に結び付けたものに見える。

さて、この上皇の第二回の御幸を載せる諸本で、南都本以外の諸本には上皇の願文が収められている。今この願文を読むと、上皇は第一回の御幸の折の御告の通りの病に罹ったので、その平癒祈願の為に御幸されたように見える。源平盛衰記・四部合戦状本・南都本に記されるお札申しについては、一回目の御幸で「寶宮之裏ニ垂ル靈詔ヲ 有リ其ノ告ノ之銘スル意ニ」ということがあったとは記しているが、その「靈詔」(具体的な内容は不明)へのお札申しといった表現はない。一方、延慶本・長門本・源平盛衰記と当道系諸本とに見られる「天下静謐ノ御祈」については「東國」「源氏」といった文字は願書に全くなく、これらの祖本の編著者の作文という気がする。「平家物語」編著者は「聖躰不豫ノ御祈」の為の上皇のこの願文を「平家物語」に収める時に、「天下静謐ノ御祈」とか第一回の「御幸驗」(四部合戦状本)への御札だとか、地の文で取り繕おうとしたのに違いない(この二つの目的のいずれが初発の形かということについては、未だ私見を定めることが出来ない)。

右のように第二回の御幸の記事は、この時期に上皇の御幸があり、しか

れた旨を記し、源平盛衰記と当道系の中院本・太山寺本・八坂本を除く諸本とは十八日に西八条邸に入られた旨を記す。鳥羽殿を経て、二十六日(長門本は二十七日らしい)に厳島に着いたことになっている。『山槐記』『嚴島御幸記』によれば、上皇は、四日土御門(邦綱)亭、十七日八条二品亭、十九日出立、河尻邦綱山莊、二十日福原清盛亭、二十六日厳島着という旅程であった。「平家物語」諸本は「大政入道ノ西八条ノ宿所」といった表現をして、清盛の所在を曖昧にしている。

厳島に一日逗留して(当道系諸本のうち百二十句本・中院本・太山寺本は中一日、八坂本は中一兩日、他本は中二日とする。長門本を除く非当道系諸本はこのことに触れない)、法華会(延慶本。当道系諸本は「經會」(覚一本)とする)、願書(長門本)、七日の参籠(長門本)、結願の説法(長門本は澄憲僧都。太山寺本・八坂本を除く当道系諸本は公顕僧正の表白とする。長門本以外の非当道系諸本と太山寺本・八坂本にはない)、舞楽(延慶本と当道系諸本にある)、大宮以下の巡拝(平松家本・竹柏園本・鎌倉本・太山寺本・八坂本以外の当道系諸本にある)、勸賞が行われた。『嚴島御幸記』によれば、中二日の逗留(二十六日着、二十九日発)だったようで、その間、御経供養、公顕僧正の表白、神楽、大宮以下の巡拝、勸賞等が行われている。覚一本以下の当道系諸本は『嚴島御幸記』を取り込んでいるのだが、長門本が何に拠ったかは詳にしない。

二十九日、帰途についた一行は数名の泊に着く。ここにこの節の最初に記した後白河法皇の御幸の時に設けられた御所があったことなどが記され

ている。(以上は、覚一本・百二十句本・小城本・中院本・両足院本にある)。四月七日、福原到着(この一連の記事で初めて「大政入道ノ福原」といった表現が出て来る)。ここで平家への勸賞が行われている(長門本は七日に他本にない盛大な歓迎の式が行われたことのみを記す。八坂本を除く当道系諸本は五日到着とする。又、八坂本では三日である)。入京は九日のことであった(当道系諸本のうち平松家本・竹柏園本・鎌倉本・覚一本・中院本は八日、百二十句本・小城本・両足院本・太山寺本は七日という風の表現、八坂本は六日となっている)。覚一本以下の日付けは『嚴島御幸記』に拠っている。猶、数名の泊のことは『嚴島御幸記』にはない。一方、『明月記』は福原到着を七日とし、入京を九日とする(九日入京は『玉葉』・『山槐記』も)。

延慶本・源平盛衰記・四部合戦状本・南都本と当道系諸本のうち屋代本・竹柏園本・百二十句本・小城本とは「新院嚴嶋へ御幸事^{付願文ア}」の章段で、長門本は「頼朝令旨施行事」の章段で、「其驗ニヤ」として、五月十四日に鳥羽殿から八条坊門烏丸の御所へ法皇が出御されたことが記されている。これらのうち源平盛衰記は、清盛の「物狂敷てをいて横さまなりけるを」「彼社に參て祈申さはや」と考えて御幸も行われたとし、法皇の出御も「彼神明のしるしにや」と、神を最も意識した表現になっている。

上皇の第二回目の嚴島御幸は「新院嚴嶋へ御幸事^{付願文ア}」として記されている。興味深いのは当道系諸本で、屋代本はこれを「平家抽書七ヶ条」の中に入れ(目録に句名はあつて本文はない平松家本・鎌倉本も同様かと

「深キ御願」(「立願」「宿願」という表現もある)、「夢想ノ告」(延慶本・長門本・源平盛衰記・四部合戦状本と当道系諸本のうち百二十句本・中院本・太山寺本・八坂本にある)、「御同心ノ由」、「明神ノ御計ニテ入道謀叛ノ心モ和キヤスル」(「当道系諸本が「法皇のいつとなう鳥羽殿にをしこめられてわたらせ給ふ」(覚一本)ということを描いているが、それを「謀叛ノ心」と言ったのであろう」といったものである。これらの中、「深キ御願」は、非当道系諸本の鳥羽殿における法皇・上皇対面場で、上皇の「深ク思キサス旨候」という言葉(参詣の理由)を法皇が「サレハコソ我事ヲ祈申サセ給ハムトテヨ」と受け取っているので、「明神ノ御計ニテ入道謀叛ノ心モ和キヤスル」といったことを具体的な内容としているのではないかと考えられる(法皇、上皇父子の会話に具体的に触れない当道系諸本も既に「したには」「入道相國の謀反の心をもやわらげ給へとの御祈念」(覚一本)と記していたので、内容は一致している)。孝子高倉上皇に相応しい理由である。「御同心ノ由」というのは清盛の歎心を買おうということ、「平家物語」に記される殆どの厳島参詣に同じ意図が認められる(源平盛衰記で清盛が「極たる大偏執の人」とされることに深く関わっている)。歴史資料では、『百鍊抄』が「有殊御願之上 入道大相國申行之故」としている。^(注四)『嚴島御幸記』によれば、福原から「唐の舟」が差し向けられ、更に福原からは清盛が同行している。猶、『玉葉』の十六日の条には上皇筆の寿量品、心経各一卷、中宮筆の心経一卷が供養の為に用意されていたことが出て来る(「平家物語」は中宮筆の経巻に注目していない)。

上皇の厳島御幸に対して「諸社ノ御幸初二ハ八幡賀茂春日平野ナトヘ御幸有テコソ何ノ社ヘモ御幸アレ」と不審がる人がある(四部合戦状本は東大寺以下の南都北嶺の大衆の批判の言葉とし、源平盛衰記は山門の批判の言葉とする。猶、中院本・太山寺本・八坂本以外の当道系諸本では、山門の批判の言葉としてもこの表現が使われる)、それに対して、別な人が事情を説明することになっている(四部合戦状本では先例に詳しい「人」の大衆の言動に対する批判の言葉としているようだが、^(注五)源平盛衰記では当の山門の言葉の中に取込まれている)。しかし、前引の言葉は、早く御橋惠言が注しているように^(注六)『嚴島御幸記』の「位おりさせ給ては加茂八はたなどへこそいつしか御幸あるに 思ひもかけぬ海のはてへ浪をしのぎていかなるべき御幸ぞとなげきおもへども」に拠ったものに違いない。猶、『百鍊抄』も「脱履之後 未幸他社 最前御幸當社 人以成奇」と記している(平田氏はこちらを重視される)。

南部北嶺の不穏な動きの為に御幸を延ばされた上皇は、それが静まると「四部合戦状本平家物語評釈(七)」「新院厳島御幸の事(①発願)」の「語釈」に「延・長・盛」には蜂起をなだめたとの記述が無く、「延・長」は大衆達も静まったと記すのみであり、「盛」は鳥羽御幸と偽って出発したとする。一方「覚」は清盛が「やうやうになだめ」たとする。「四」の場合、上皇自らが説得したかのようにも読めるが、『理』の内容、なだめた主体ともやや不鮮明である。^(注七)清盛の西八条邸から(この前に、両足院本は十七日に「八条ノ二位殿ノ宿所」、十八日に「入道相國ノ亭」に移ら

公卿日記等と読み較べて大きく異なる点は、後白河法皇との対面場がその中心となっていることである。しかし、源通親の『嚴島御幸記』には法皇のことは全く出て来ない。『玉葉』や藤原忠親の『山槐記』によれば、十八日夜、法皇は鳥羽殿から五条大宮に移ろうとしたらしい。これは、園城寺や延暦寺の大衆が法皇や上皇を奪い取ろうとしているという風聞が十七日にあり、それを警戒しての動きであったかと思われる。猶、『玉葉』の記す十八日の風聞の中には「或云 奉具二皇可有御物詣之次 可御坐遠所云々」というものもある。こちらは法皇の上皇への合流という形になるが、法皇・上皇父子の対面場がこの風聞では設定される。但し、「可御坐遠所」ということは、『山槐記』十七日条によれば、「法皇御所邊四五日禪門有被奉優之氣」ということなので、見当違いと考えられる。

ところで、「平家物語」諸本のうち中院本・太山寺本・八坂本には権門寺院に不穏な動きがあったということは全く記されていない（従って、これらの諸本では御幸が延引されたとはなっていない）。延慶本・長門本は、特に目的等に触れず、只「東大寺興福寺山門三井ノ大衆京へ可打入之由聞テ」とするが、以上の他の諸本では脱履後の最初の参詣に嚴島社が選ばれたことに抗議して、不穏な動きを見せたとなっている（四部合戦状本は東大寺以下の四寺とするが、中院本・太山寺本・八坂本以外の当道系諸本は山門の言動として描く。又、源平盛衰記は「諸寺諸社騒動し」という表現に山門の衆徒の僉議という形を追加する）。源平盛衰記と中院本・太山寺本・八坂本以外の当道系諸本とが描く山門の抗議は『玉葉』の十六日条や

『嚴島御幸記』に山門の不穏な動きが記されているので、そのような（山門が特に目についた）ことの反映だろう。これに対して、延慶本・長門本の記事は、『玉葉』・『山槐記』の記す十七日の風聞の方に拠ったものかと見られる。

さて、十八日夜の法皇の移履だが、『玉葉』・『山槐記』とも前大将宗盛が使者を送って止めたことを記している。「平家物語」諸本では、十八日の夜に入って（太山寺本は時を記さず、八坂本は朝としている）、「日来ハ御詞ニモ出サセ給ハサリケルカ俄ニ」（源平盛衰記だけは「山門の訴訟もわつらはしとて よそき、には鳥羽殿への御幸とひろう有」と、嚴島御幸の擬装だったかのように描いて行く）宗盛を呼び出し、明十九日に鳥羽殿に立ち寄りた旨を相談する、宗盛が自分の一存で承諾すると言う（清盛に相談もせず、事を行っているのは特色がある）ので、上皇は鳥羽殿への使者を宗盛に務めて貰うという内容になっている。宗盛が上皇の相手を務めているのは、『玉葉』・『山槐記』の記すような宗盛の行動が本になったことに因るのではなからうか。富倉徳次郎は「平家物語」の描く法皇、上皇父子の対面を「史実と認めてよい^(注)か」としたが、筆者にはやはり孝子高倉天皇という線で虚構されたもののように思える。^(注)

延慶本を始めとする非当道系諸本によれば、上皇は十七日に立出することになっていたという（八坂本以外の当道系諸本には具体的な日は示されていない。八坂本は十九日とする）。これは『嚴島御幸記』等の記載に一致する。上皇が参詣を思い立たれた理由として諸本に挙げられているのは、

「平家物語」諸本に描かれた

厳島大明神、厳島社（二）

橋口晋作

四

上皇や女院が厳島に参詣したのは、承安四（一一七四）年三月の後白河法皇、建春門院の御幸が初めてである。源平盛衰記がこの御幸を「一院女院厳嶋御幸」の一段として収めているが、後述の女院や高倉上皇の願文の中にその初めての旨は記されている。

源平盛衰記では、冒頭の両院の参詣は清盛に勧められたので、その心に随つてであつたとされる。この点は、九条兼実の『玉葉』に両院が「入道相國福原別業」に向かわれたとあり、吉田経房の『吉記』に「入道相國自福原可被参仕云々」とあるので、その通りであつたろう。「平家物語」に出て来る厳島参詣は、上皇、女院のものも含めて、その殆んどが清盛に深い関わりを有っている。このことについて、「一院女院厳嶋御幸」の章段は極めて興味深い特質を見せる。それは、この章段の終わりでのこのことに触れて、「よのつねの人の習といひながら太政入道は極たる大偏執の人」であつたとし、その「極たる大偏執の人」ということを例示するという風で、次の章段「澄憲祈雨三百人舞」に及んで行くことである。かつて山下宏明氏

が源平盛衰記の宗盛の描き方について「きめつけ方が異様に執拗」ということを指摘されているが、「極たる大偏執」という性格を強調する、この辺りの筆には山下氏の指摘に通じるものがある。

公卿日記等のこの御幸への言及は三月十六日の出立の日が主であるが、源平盛衰記では二十六、二十七両日の両院の参詣記事が中心になっている（『吉記』二十八日条には「依風波兩日間御逗留備前國」とあつて、虚構の臭いもある）。両院の参詣では、法皇には願文がなかった旨が記される一方、女院の願文が長く引かれている。その願文の中では院号を貰つたことが第一に報告されているが、この参詣はそのようなことを理由にして、建春門院（平家）の側で企てられたものであろう。願文で気になることは「伏乞玄應成就 素望円満 然則往還之間無風波之難」という文である。先述のように『吉記』によれば風波の為に船出できなかった日もあつたらしいが、源平盛衰記の編著者はそのようなことを知りながらこの部分を記したのであろうか。猶、源平盛衰記ではここが建春門院の生前の記事の最後になる（延慶本・長門本では熊野詣でが最後で、「サマ／＼ノ靈瑞」を得たにも拘らず、帰京後間もなく崩御している）。

上皇や女院の厳島御幸で「平家物語」諸本がごぞつて採り上げているのは高倉上皇の御幸である。上皇は二回御幸されたが、第一回は全ての「平家物語」に記されている（勿論、欠巻の場合はある）。

高倉上皇の一回目の厳島御幸は治承四（一一八〇）年三月に行われた。「平家物語」はこの御幸を「新院厳嶋へ可有御参事」等の章段で描いているが、